

## “吃X”構造における分類と意味の拡張について

曹 志偉<sup>※1</sup>

**要旨** “吃（食べる）”は現代中国語において、使われる頻度が高い動詞で、“吃X”で構成されたフレーズ、慣用語、成語、しゃれ言葉（歇后语）などは数が多く、しかも表現力に富む特徴がある。例えば、“吃亏”「損をする」、 “吃豹子胆”「恐れることがない」、 “吃情调”「ムードを味わう」などである。これらの使い方の特徴には、構造の固定性と意味の整合性がある。論述の便宜のため、筆者は“吃”の後の部分を“X”と総称することにした。また“吃X”という構造は、内包的意味（connotative meaning）、連带的意味（reflected meaning）と密接に関連し、内包的意味の具象化および連带的意味の具体化と外向化を通して、その意味を拡張したと考える。本稿は“吃X”という構造における分類及び意味の特徴を検討する上で、“吃X”意味拡張のメカニズム及び影響要因の分析を試みる。

### はじめに

“吃”は形態素として、後ろの“X”と組み合わせて複合語またはフレーズを構成する。“吃X”中の“吃”は動詞の機能を有するばかりでなく、顕著な造語機能をも有する。そのため、“X”は異なる語から、様々な角度で“吃”の意味を提示することができる。また“吃”の意味は“X”の変化に伴って、多様化する傾向がある。“吃X”で構成されたフレーズ、慣用語、しゃれ言葉（歇后语）などの固定的な使い方は、数が多くしかも頻繁に使用されている。更にその意味は多様化を呈している。これらの使い方を総合してみると、ほとんどタベルという意味は含まれていなく、“吃”という動詞を借りて、更に具体的かつ生彩に富む表現が多い。従って、“吃”は“喝”「飲む」、 “得到”「手にする」、 “利用”「利用する」、 “获得”「獲得する」などの意味にまで拡張される。以上から分かるように、“吃”の様々な使い方には、既に本義を超える傾向がみられる。

本稿は“吃X”における構造・意味・機能という三者間に存在する対応関係あるいは内部的メカニズムを究明することにある。そこで“吃”の後の部分にある目的語及び補語の影響を分析する上で、“吃X”における文法構造及び語句組合せの傾向を検討し、更に“吃X”における意味拡張の分析を試みる。論述の便宜のため、筆者は“吃”の後の部分を“X”と総称することにした。周知のように、現代中国語の動詞“吃”における基本的意味は、食物を咀嚼して呑み込むのであるが、それ以外にも様々な意味が含まれる。特に“吃X”は、様々な機能・用法を持つ構造である。本稿が特に興味深い用法として注目するのは、動詞“吃”を用いているが、タベルという本来の意味が含まれない現象である。このような“吃X”における意味の拡張傾向は未だに究明されていない。特にいくつかの緊縮文形式も整理されていなく、その上、はっきりとした文法的標記もない。それ

※1 外国語教育センター

ゆえ、“吃”の意味が理解されにくいいため、それらを深く検討していく必要がある。

### 1. 先行研究と歴史的に見る“吃”

まず、現代中国語における“吃”はどのように使われているのだろうか。

『古今漢語字典』<sup>※2</sup>の解釈では次の通りである。(以下、日本語訳筆者)

『古今漢語字典』では“吃”を十項目に分けている。用例は次の通りである。

- ① 食物を咀嚼する。また飲む、吸うことを指す。  
例えば：临歧意颇切，对酒不能吃。(唐・杜甫)
- ② 食物を販売する場所で食べる。一定の標準で食べる。例えば：吃食堂，吃小灶。
- ③ …を頼りに生活する。例えば：靠山吃山，靠水吃水。(知侠)
- ④ 相手の勢力を消滅することで、軍事或は象棋類などに多く使われている。  
例えば：先吃炮再将军。
- ⑤ 受ける、耐える。例えば：昭王被考，吃苦不前。(《敦煌变文集》)
- ⑥ 消耗する。例えば：吃力，吃劲。
- ⑦ 吸収する(液体)。例えば：这纸不吃墨。
- ⑧ ある物質が他の物質の中に入る。例えば：吃水，吃刀。
- ⑨ 理解する、把握する。例えば：吃透文件的精神，吃不准。
- ⑩ 受身、使役。例えば：吃人笑话。

以上のような語義と項目をまとめると、例①だけは“吃”の本来食べる意味で使われているが、例の②～⑩ではタベルの意味が含まれていない。それゆえ、“吃”は頼る、消滅、受ける、吸収などの意味にまで拡張される。

これに対し、C. E. ヤーホントフ<sup>※3</sup> 1957は、“chi (吃) ‘(文字通りには) 食べる、召し上がる’なる単語があげられる。この単語は、中世中国語においては、受動の意味(‘受かる、経験する’)を有する動詞として、非常に広く用いられたが、その意味は、現在では数個の連語のなかにしか保たれていない。”と述べた。

更に、朱德熙<sup>※4</sup> 1981は、“‘吃饭’は粘着型動目構造であり、動語の‘吃’と目的語の‘吃’はどちらも独立した語である。‘吃亏’[‘割りを食う’]の‘亏’は付属形態素であって、語ではなく、従って、‘吃亏’は動目型の複合動詞であり、動目構造ではない。”と論述した。

王占華<sup>※5</sup> 2000は、認知言語学の視点から“吃食堂”という“VO(動目構造)”での“O(目的語)”の性質などの問題を検討した。彼が“‘食堂’は場所を表す目的語ではなくて、方式目的語でもない。これは受身目的語の暗喩の形式だ。”と見解を示した。

白雲<sup>※6</sup> 2007は、“‘吃(喫)’が最初‘食べる’意味として使われた(《说文・新附》)。唐五代に‘吃

※2 商務印書館辞書研究中心編 2003『古今漢語字典』商務印刷館 75.

※3 C. E. ヤーホントフ著・橋本萬太郎訳 1987『中国語動詞の研究』白帝社 147.

※4 朱德熙著・杉村博文・木村英樹訳 1995『文法講義』白帝社 147.

※5 王占華 2000「‘吃食堂’的認知考察」『言語教学と研究』. 2. 58.

※6 白雲 2007「论常用动词虚化程度的等?性」『語文研究』. 3. 22.

（喫）’を、‘蒙る・被る’まで派生し、宋代にそれを虚化され、受身の前置詞を意味する。元明時代に受身としての‘吃’の意味を更に虚化され、原因を表す文法的意味まで派生してきた。”と追跡した。

古川裕<sup>※7</sup> 2007は“‘吃’は‘受・挨’など受身の意味に使われ、具体的な言い方に、‘吃惊, 吃批评, 吃他耻笑’「驚く, 批判を受ける, 他人の笑いものとなる」などの用例がある。同じような理屈に、‘吃亏’「割りを食う」は‘使人受到损失・使人遭受不利条件’「損失をこうむる, 不利の条件にさらされる」などのマイナスの意味を表すとされる。”と言及した。

これらの論述と研究は、いずれも動詞“吃”のみの論考である。本稿は先行研究の基礎の上で、“吃X”を一つの構造として、その分類と意味の拡張を考察することを試みる。

## 2. “吃X”構造における分類

“吃X”の各用法と構造の位置によって、次のようにまとめることができる。この分類の理解を助けるために、後ろにいくつかの用例を挙げる。

### 2.1. 粘着型動目構造

① “X”は名詞または名詞フレーズを目的語とする。これは“吃X”の基本的形式である。また“X”の種類によって、以下のように二項目に分けられる。

A. “X”を食べられる物とする。

例えば：吃豆腐，吃夜宵，吃鸡肋，吃皇粮，吃偏饭，吃错药，吃花生米，吃独食，吃鸭蛋，吃现成饭等。

(1) 我想，曾经企图吃你豆腐的男人不可能有好下场吧？

（席绢《城堡没公主》）「あなたにセクハラをしようとする男性」

(2) 他们要维持现状，吃现成饭，于是经济改革就不可避免地会遇到严重阻力。

（蒋子龙《开拓者》）「現状に甘んじる」

B. “X”を食べられない物とする。

例えば：吃食堂，吃小灶，吃大碗，吃情调，吃老本，吃官司，吃豹子胆，吃闭门羹，吃禁果，吃定心丸，吃冤枉等。

(3) 从此韩康吃官司去了，他的最后的一个药店抄没归官。

（聂绀弩《韩康的药店》）「その後、韓康は訴訟に巻き込まれた」

(4) “这些吃冤枉的家伙是顶怕死的，你摆起机枪摔它两梭子，它飞得可高啦。”

（杜鹏程《保卫延安》）「これらの無実の罪を着せられたやつら」

② “X”は名詞または名詞フレーズを目的語とするが、主語を動作者と固定する用法によって、“不吃X”の形式は構成される。

例えば：兔子不吃窝边草，好马不吃回头草，好汉不吃眼前亏。

この使い方はよく奥深い道理の説明，あるいは相手がある事をしてはいけないことを注意する時に使われる。

(5) 人家说，兔子不吃窝边草，你对本房人都不能手下留情么？

※7 古川裕 2007「有关‘亏’字语义转换现象的语用—认知解释」『現代中国語研究』9. 75.

(罗旋《南国风烟》) 「自分の身内に手を出さないたとえ」

(6) 既然到了这个地方就趁早回头，少吃苦头——好汉不吃眼前亏。

「立派な男子なら、目前の災難を避ける」

③ “X” は正反対の形容詞または動詞である場合，“吃X 1 不吃X 2” という形式に構成され、強い対比の意味が生じる。

例えば：吃順不吃抢，吃软不吃硬，敬酒不吃吃罚酒等。

(7) 你们居然还在这儿不清不楚，自以为有什么份量，想要教训我，简直是敬酒不吃吃罚酒！

(琼瑶《雪珂》) 「まったく時機を逸するとつまらない目にあうよ」

(8) “请你告诉他们，我姓屠的吃软不吃硬！”

(矛盾《子夜》) 「やさしい相手には弱く、強い相手にはきついんだ」

④ “吃X” は他の動詞と組み合わせて連動式となる。

例えば：吃一堑长一智，吃不了兜着走，吃小亏占大便宜，咸吃萝卜淡操心，吃了砒霜药老虎等。

(9) 我们原来想同张敬轩合力抵御官军，险些儿给他吃了，这也算不上什么挫折。吃一堑，长一智嘛。(姚雪垠《李自成》) 「一度挫折すると賢くなる」

(10) 会不会弄成吃了砒霜药老虎，是我们应该考虑的。

(叶圣陶《抗争》) 「自分から仕掛けた畏に、かえって自分が落ちるたとえ」

## 2.2. 動目型の複合動詞あるいは形容詞

① “X” は単音節形容詞または名詞として、新しい複合動詞を構成する。

例えば：吃亏，吃惊，吃苦，吃素，吃捧，吃罪，吃醋，吃枪，吃腻等。

(11) 她为她死掉的女儿吃醋道：“瞧不出你这样一个人倒是你抢我夺的一块好肥肉!”。

(钱钟书《围城》) 「嫉妬する」

(12) 这看法倘不改变，我想，世界是还要毁坏，人们也还要吃苦的。

(鲁迅《拿破仑与隋那》) 「苦しみを味わうのだ」

② “X” は単音節形容詞または名詞として、新しい形容詞を構成する。

例えば：吃力，吃香，吃紧，吃劲等。

(13) 中国学生当然也不会吃香的。稍微大一点的旅馆就不租中国人，更不用说讲体面的人家了。

(老舍《二马》) 「人気がある」

(14) 姓韩的找不到还不吃紧，最叫她担心的是杨晓冬。

(李英儒《野火春生斗古城》) 「逼迫していない」

## 2.3. 動補構造 (V得C/V不C)

“X” は形容詞または動詞として、補語となる。

例えば：吃得开，吃得住，吃不准，吃不透，吃不穷，吃不到等。

(15) 作大事的人都得八面玲珑。方面越多，关系越多，才能在任何地方，任何时候，都吃得开。

(老舍《四世同堂》) 「受けがよい」

(16) 也就是老张有年，学务大人经验宏富，不然谁吃得住这样的阵式！

(老舍《老张的哲学》) 「耐えられる」

### 3. “吃X”における文法化

“X”は“吃”の後の部分として、目的語または補語とすることができる。“吃X”における文法化は、動目構造あるいは動補構造の中で行われ、文法性質の弱化傾向と意味伝達の多様化をもたらした。そのため“吃X”における動詞は、すでに典型的なタベルという本来の文法的性質を喪失し、語義の重点が“X”に移行する傾向が見られる。

#### 3.1. “吃”における意味の弱化傾向

動句式“吃X”構造では、“X”は受事者として、“吃”の意味変化を決定する。以下はよく見られる用法である。例えば：

- (17) a 他是个吃软饭的人。「男性が女性を頼りに生活する」  
 b 她是个吃青春饭的人。「若さを売りにする職業で生計を立てる」  
 c 他是个吃闲饭的人。「ぶらぶらして暮らす」

例(17)の三つの用例には一つの共通点がある。即ち“吃XX飯”である。“吃”と後の部分は動目構造として限定語になり、“吃”は「頼る」という意味になる。“X”を種類の異なる飯とし、“吃”の用法に限定すると同時に、その意味を提示する。“吃饭”は“吃大锅饭、吃现成饭、吃偏饭、吃洋饭”「親方の日の丸、現状に甘んじる、特別扱われる、外国人に頼り生活する」などまでに拡張でき、ある職業または生活手段を表すことができる。他に、“吃X”としての動作者が固定の名詞でなければならない場合がある。例(18)の三つの用例はいずれも主・述・目構造で、固定用法であり、構造が固定化されているという特徴がある。また“吃”前後の語は自由に置き換えることができない。この“X”は受動者だけであり、“吃”には動作者と受動者に繋がる役割があると同時に、明白な対比効果もある。例えば：

- (18) a 大鱼吃小鱼。(俗语) 「強いものが弱いものを食う」  
 b 张飞吃豆芽。(俗语) 「朝飯まへのたとえ」  
 c 王八吃称砣。(俗语) 「意志が固くて変わらないたとえ」

朱德熙<sup>8)</sup> 1981は“‘大鱼吃小鱼’「大きな魚が小さな魚を食べる」と‘小鱼吃大鱼’「小さな魚が大きな魚を食べる」とでは意味が異なる。主語と目的語が同時に表れると、多くの場合は、このように主語が動作者を表し、目的語が受動者を表すものである。”と指摘した。

“吃X”は主動態構造にもかかわらず、受身の意味でよく使われている。しかし、その場合、文中には受身態“被、叫、让、给”などの前置詞は置かれない。例えば：

- (19) a 他吃官司了。「訴えられる」  
 b 他吃闭门羹了。「門前払いを食う」  
 c 他吃冤枉了。「無実の罪を着せられる」

例(19)の三つの用例は動目構造にもかかわらず、強い受身の意味が含まれる。“X”はすでに食品類の名詞に限らず、結果を表す名詞である。それゆえ“吃”は出会う、遭遇するという意味がある。従って、(19)a中の主語“他”は裁判の発動者ではなく、裁判の被告者であり、“X”の動作者の対象でもある。

※8 朱德熙著・杉村博文・木村英樹訳 1995『文法講義』白帝社 145.

例⑳の三つの用例は“吃X”の動補式で、“X”は補語の否定式となる。その中の“吃不透”，“吃不开”，“吃不消”は動補構造の否定式によって構成された固定的形式で，主語が置かれる状態を表し，そして“吃”の意味が「理解する・重視する・耐える」に分けられる。

- ㉑ a 他吃不透文件的精神。 「しっかり理解できない」  
 b 他在单位吃不开。 「歓迎されない」  
 c 他的身体吃不消了。 「耐えられない」

(17)~㉑の用例において，“吃”はいずれもタベルという意味ではなく，これらの“吃”は後ろの成分により，意味に変化が生じる。いわゆる“吃”の動詞機能は弱化的傾向があると考えられる。

### 3.2. “X”が意味の重心となる (the core of meaning)

“吃X”を一つの構造として，色々な角度から考察すると，語の用法や意味の多様化といった特徴が発見できる。一般的に，動詞は文の要であり，文の程度や性質などを左右するのに欠かせないもので，“吃”という動詞も例外ではない。しかし，“吃X”は一体どのように使われるのか，これはその後の部分に左右されると考えられる。つまり“X”の語彙要素に間接的あるいは直接的に作用することである。“X”の意味は動作・結果・目的などの変化により，動詞“吃”の多義性 (ambiguity) を表す。このような動詞の多義性は中国語には欠かせない。それゆえ，動詞本来の意味を理解するとともに，それらと組み合わせられた他の要素との呼応に注意を払う必要がある。これは“吃X”をよく理解するための良い方法である。

“吃X”は様々な語義を示し，厳格な意味における形態標記を欠いているため，従来の文法モデルに従って分析することが難しい。“X”が持つ意味は以下の表のように分類できる。

分類	吃+ X用例	日 本 語 訳
感受	吃味儿	気にする。余計なことを考える。
結果	吃豆腐	女性に対してセクハラをすること。
目的	吃情调	新しい食べ方，つまりムードを味わうこと。
頼り	吃老本	今までの貯蓄を頼りに更に努力しない。
職業	吃皇粮	国家公務員が国の税金で安定な生計を建てること。
受身	吃官司	訴えられる。裁判沙汰になる。
場所	吃食堂	食堂で食事をする。自宅で炊事をしないこと。
時間	吃夜宵	夜食を食べること。
標準	吃小灶	特別な待遇を受ける。
道具	吃大碗	大きなどんぶりで食事をする。

## 4. “吃X”における意味拡張

一般的に“吃X”の意味は概念的意味 (conceptual meaning) を除いても，内包的意味 (connotative meaning) と連帯の意味 (reflected meaning) がある。内包的意味は物事の非本質的な属性を反映する。それに対して，連帯の意味は一つの語の多義性を指すものである。“吃X”における内包的意味と連帯の意味は緊密に相関し，内包的意味の具象化および連帯の意味の具体化と外向化を通して，“吃X”の意味を拡張させる。

#### 4.1. 内包的意味の具象化

“吃X”の“X”が食物の名詞であるとき、その食物の具象を通して意味を拡張させる。表面的な意味は物を食べることであるが、その内包的な意味はその食物を比喩することにある。また食物の外見からその内包的具象を表す。例えば、“吃螃蟹”「カニを食べる」はよく新しい物事にチャレンジすることのたとえに使われる。これは「カニ」の怖い外見の比喩である。また“吃鸭蛋”「アヒルの卵を食べる」で零点を取ることのたとえで、「アヒル」の卵の外形で更に内包的意味を具象化することができる。次の例を見てみよう。

㉑) 所以我想，第一次吃螃蟹的人是很可佩服的，不是勇士谁敢去吃它呢？

（鲁迅《今春的两种感想》）「カニを食べる。大胆で勇気があるたとえ」

㉒) 我一听“打”字儿心就颤，就想到上次打靶吃鸭蛋。

（朱光斗《神枪手》）「試験などで零点を取ることのたとえ」

㉓) 她一闪似的就走到他的面前，临近了，她斜着身端起一个肩膀来，好似要请他吃个馒头，圆圆的肩头已离他的嘴不很远了。

（老舍《文博士》）「まるで肩を目の前に出す（丸いものの比喩）」

㉔) 她们管哭哭啼啼叫作爱的甘蔗，我才不吃这样的甘蔗，我和她们说不到一块。

（老舍《樱海集・阳光》）「私はこんな泣き虫を相手にしない」

㉕) 听他讲话，就像吃腻了鸡鸭鱼肉，而嚼一条刚从架上摘下来的，尖端上还顶着黄花的王瓜，那么清鲜可喜。（老舍《四世同堂》）「耳にたこができるたとえ」

㉖) “即使你说的一点不错，到底我还是怯！”杜亦甫的态度很自然了，像吃了一料泻药，把心中的虚伪全打净了似的。（老舍《火车集・杀狗》）「まるで下剤を一錠飲んだように」

また“吃”の対象物が非食品の場合、それは人々が様々な想像を働かせて作り上げたものであり、非食品または抽象的なものを“吃”の対象物とする用法は、レトリックにおける“比拟”の擬人法に相当する。イメージからその中に含まれた意味を連想させる。例えば：

㉗) 有的一上台就哆嗦，好像吃了烟袋油子的壁虎，一句一个“鄙人”。

（老舍《牛天赐传》）「まるでやにを食べたヤモリのように」

㉘) 这些话，碰到他自己心上的委屈，就像一些雨点儿落在干透了的土地上，全部吃了进去。

（老舍《骆驼祥子》）「全部吸い込んだ」

㉙) “我出两千五百块钱，你从中吃多少，我不管。”

（老舍《四世同堂》）「君がその中からどれぐらいとっても、僕は気にしない」

以上の用例から、“吃X”の表現方法によって、内包的意味を具象化したことが分かる。

一般的に“内包的”と“具象化”は矛盾した状態にある。なぜなら“内包的”の内容と“具象化”されるものに大きな開きがあるため、両者を結びつけることが困難であるからだ。しかし、“吃”は、具体的な名詞である“X”と繋げることによって、“内包的”の内容の参照物となることができ、更には“内包的”をもっと意味深く、説得力を持たせることができる。例の㉖では、“吃了一料泻药”「下剤を一錠飲んだ」で、すっきりとした心理状態を際立たせることが出来る。また例の㉗では、“吃了烟袋油子的壁虎”「やにを食べたヤモリ」で、自信が持てない気まずい姿を描き出す。このようなレトリック効果は、一連の推理過程の中で実現されたもので、“内包的”とし

ての参照物“X”がもっと具体的に明確になればなるほど、“内包的”の効果も強くなる。

#### 4.2. 連帯的意味の具体化

“吃X”における連帯的意味の具体化は“X”の変化に伴うもので、“X”は味覚形容詞として、それぞれ違った角度から表される感情または態度などの表現により、食物動詞“吃”の特有の色・香・味に関する表現力はいっそう具体化する。例えば、“吃酸甜苦辣”「世の中の艱難辛苦のたとえ」は人生の様々な経験を表す。“吃甜头”「うまいことをする」は恩恵を受けた心理的な変化を表す。“吃苦”「苦労を味わう」は忍耐の程度を表す。それに対して、“吃香”「評判がいい」は人々に歓迎される程度を表す。このような文は味覚に関する語が含まれるため、生き生きと鮮明に、分かりやすくして道理が深く、人々に味覚から具体的な意味合いを連想させる。次の例を見てみよう。

30) 他挖起一大匙道：“吃人生里的酸甜苦辣喽！”呼噜，一口吃下。

(席绢《城堡没公主》) 「人生の艱難辛苦を味わう」

31) 他那副为了遮丑的鸡屎片儿墨黑镜，这家伙原本是北风拧上的一个大流氓，他那只眼睛，就是因为争风吃醋被人打瞎的。(张恩忠《龙岗战火》)「やきもちを焼く」

32) “四个国家，实在是两派。你亲了这一边，那一边就要吃醋。”

(茅盾《锻炼》) 「嫉妬する」

33) “满天星那份神儿，长的猪不吃狗不啃的丑样，可人家总吃香的，喝辣的。”

(从维熙《南河春晓》) 「何でも好き放題，裕福に暮らす」

34) “老兄，你可知道头发是我们中国人的宝贝和冤家，古今来多少人在这上头吃些毫无价值的苦呵！”(鲁迅《头发的故事》)「意味のない苦労を味わう」

以上の用例から、“X”としての酸っぱい・甘い・苦い・辛いなどの味覚形容詞は意味的に、文化的背景あるいは一般常識の判断から、抽象的な内容は具体化され、より説得力を持って相手に伝えられる。つまり、「抽象性」を取り除くことができる。また、“吃X”の意味は拡張されているが、連帯的意味の範囲を超えることはなく、更に具体化しているだけである。連帯的意味の語句には、表層語意と言語形式から、解釈が得られないものがある。しかし、それらは全て味覚形容詞から具体的な結論を得ることができる。

#### 4.3. 連帯的意味における外向化

“吃X”は話し手の意識を強く表す特殊なレトリック効果があり、はっきりとした感情を表すニュアンスを持つ。“吃X”そのものが持つ連帯的意味は内包的意味へと進化して、新たな意味を形成する。筆者はそれらを連帯的意味における外向化と呼ぶ。次の用例を比較してみよう。

35) a 她是一个能吃苦的人。(褒义) 「苦労に耐えられる人」

b 她是一个吃屎也要吃尖儿的人。(贬义) 「何をしても一番を取りたい人のたとえ」

36) a 他吃豹子胆了，竟敢给上司提意见。(贬义) 「なんでも恐れない人のたとえ」

b 他是第一个吃螃蟹的人。(褒义) 「新しい物事に挑戦するたとえ」。

“吃X”中の“X”は異なる語を使い、様々な角度から“吃”に関する意味を提示したため、様々な感情のニュアンスを表すことができる。用例35aでは、勤勉で気力がある人への称賛であるが、用例35bでは、勝負心の強い人に対する風刺である。なぜなら“屎”「大便」を動作の対象とすることは、明らかに揶揄・けなしの意味が含まれるからだ。更に用例36a, bでは、同じく肝が太い



人の表現であるが、30aでは盲目的な大胆さを表現している、30bでは新しい物事にチャレンジする大胆さを表現している。それぞれはっきりとした感情のニュアンスを表す。これは“吃X”の連带的意味における外向化的表現である。次にけなすまたはマイナスの意味がある用例を見てみよう。

37) 他们会吃人，就未必不会吃我。

（鲁迅《狂人日记》）「人を殺す，攻撃するたとえ。」

38) 耶稣教传入中国，教徒自以为信教，而教外的小百姓却都叫他们是“吃教”的。

（鲁迅《吃教》）「外国の宗教によって生活する」

39) 每逢路过南门或西门，看见那破烂的城楼与城楼上的炮眼，文博士就觉得一阵恶心，像由饭菜里吃出个苍蝇来那样。（老舍《文博士》）「ハエを食べてしまった」

40) 有许多方言都有很有趣的来历，譬如“吃马屁者”叫做“喜戴高帽”。

（林守庄《〈何典〉序》）「お世辞を聞くのが好きな人」

41) “这个年轻人，不仅胃口越来越大，而且总是吃一想二眼观三。”

（刘彦林《春风得意》）「欲張りで何もかもほしい」

42) “咱不受那份禄，也不担那份险，光想吃着碗里看着锅里还行？”

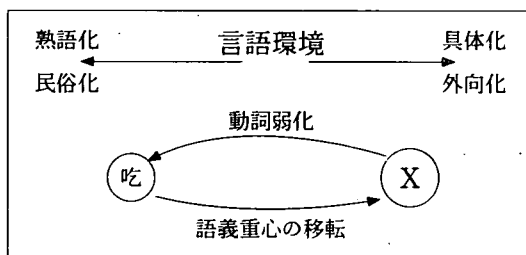
（刘沙《龙马精神》）「口にはお張りながらまだ鍋に手を突っ込む。欲の深いたとえ」

以上の用例の中における“吃X”の意味は、連带的意味を更に具体化・外向化させた結果であり、二つの特徴がある。第一に“吃”の目的語は非現実的または仮説的なものである。例えば，“吃人”「人を殺す」，“吃教”「宗教に頼る」などがある。このような使い方は論理的なものではないが、顕著な派生の特徴がある。第二にレトリック効果を強調するため、わざと比喩と誇張した言い方を使う。例えば，“吃出个苍蝇”，“吃马屁”などがある。“苍蝇”（ハエ），“马屁”（馬のおなら）などで人々が嫌う語句を使い、風刺と皮肉の意味を表し、明らかなけなしの意図がある。

## おわりに

“吃X”という構造は日常生活と社会实践の中で生まれたものであり、通俗的で分りやすく奇抜で、さらに定型化されているという特徴がある。また意味・文法・ニュアンスの角度から、更に中国語の変遷の歴史及び実際の応用から考察すると、筆者は“吃X”について以下のように結論が付けられる。第一に“吃”は多義語で、強い語の結束力があり、名詞または形容詞と一緒に用い幅広い複合語あるいはフレーズを構成することができる。第二に“吃”の意味変化は後の部分の変化によるもので、“X”が意味の重心となる。第三に“吃X”は内包的意味の具象化及び連帯化の具体化と外向化を通して、語義を拡張し、厳格な意味における形態標記を欠いているため、従来の文法のモデルに従って分析することはできない。

以上をまとめると、筆者は“吃X”構造における意味拡張について次の図のように考える。



なお“吃X”構造における様々な用例は、幅広く使われている。これについては今後の課題として更に研究を進めていく必要がある。

#### 引用・参考文献

- 王占華 2000 「吃食堂」的認知考察『言語教学と研究』第2期  
 白雲 2007 「论常用动词虚化程度的等级性」『語文研究』第3期  
 C. E. ヤーホントフ著・橋本萬太郎訳 1987『中国語動詞の研究』白帝社  
 古川裕 2007 「有关“亏”字语义转换现象的语用—认知解释」『现代中国語研究』第9期  
 陆俭明 2006 「汉语语法研究的走向」愛知大学の講演稿  
 朱德熙著・杉村博文・木村英樹訳 1995『文法講義』白帝社  
 曹志偉 2005 「中国語熟語の分類方法について」『愛知淑徳大学学报』第6期  
 陳晏・曹志偉 2005『中国語熟語760—中日双方向による攻略法—』晃洋書房  
 陳晏 2003 「汉语饮食文化熟語妙用法浅析」『汉语教学研究』总第5期, 78-85  
 商务印书馆辞书研究中心編 2003『古今汉语字典』商务印书館  
 愛知大学編 1999『中日大辞典』(増訂第二版)大修館書店

#### 例文出典

- 阮智富・郭忠新主編 2000『現代汉语大词典』汉语大词典出版社  
 老舍 1999年『老舍全集』人民文学出版社  
 鲁迅 2006『鲁迅文集』吉林摄影出版社  
 席絹 2002『城堡没公主』江苏文艺出版社  
 钱钟书 1999『围城』人民文学出版社  
 琼瑶 1996『雪珂』花城出版社  
 琼瑶 1996『烟锁重楼』花城出版社